2004年3月
地域環境経営コース　近藤研究室　0252004　仁賀崇之

環境共生型ペンションにおけるホストとゲストの多様な関係性に関する研究
―「舎爐夢ヒュッテ」の18年―

1．本研究の背景

現在、宿泊施設では、環境に対する意識が高まり、ECOTEL やISO14001 のような環境認証を取得し、環境配慮を行う施設や、自主的に環境配慮の取り組みを行う施設が増加している。また、環境に配慮した宿泊施設を評価し、そのような宿泊施設を積極的に利用していこうという取り組みも行われている。

以上のような環境配慮の取り組みは、主に環境のハード面に関しての取り組みであることが多く、ソフト面での取り組みはあまり取り組まれていない。つまり、「宿泊施設の環境配慮＝ハード面での取り組み」という図式が強い事が現状である。

2．ハード面・ソフト面の取り組みについて

本研究で用いているハード面・ソフト面の取り組みについて、ハードーソフト、ホストーゲストという二つの軸で構成している、「宿泊施設における環境配慮の４領域（表１、図１）」を用いて説明する。これは、ハード面、ソフト面それぞれの取り組みが、ホスト側、ゲスト側のどちらに関係があるかを表した図である。

表１　環境配慮の４領域の取り組み内容

領域	取り組みに内容
■ハードーホスト	ごみのコンポスト化、水のリサイクル、コージェネレーションなどの設備の設置
■ソフトーホスト	従業員への環境教育や規則など
■ハード ーゲスト	カードキー、タイマーで消える電気、トイレの流水音装置など
■ソフトーゲスト	環境配慮の取り組みを提示したり、伝えるなど

現在、環境に配慮した取り組みを行っている宿泊施設では、主にハードーホストの領域、ソフトーホストの領域という、宿泊施設側（ホスト側）のみの環境配慮である事が多い。宿泊施設ではゲストに負担を負わせたくないとの理由から、ハードーゲストの領域や、ソフトーゲストの領域あまり取り組まれていないのが現状である。本研究では、４領域の中でも特にソフトーゲストの領域が、今後の宿泊施設の環境配慮にとって重要であると考える。なぜなら、取り組みを理解してもらう事を通じて、ゲストの環境意識に刺激を与える事が出来る。また、近年示唆されているエコロジカルなライフ・スタイルへの転換の足掛かりになることも考えられるからである。また、ホスト側にとっては、漠然と環境配慮の取り組みをこなすのではなく、取り組みを振り返えったり、ゲストに伝えるための工夫をしたりすることが考えられる。よって、その事を通じて、環境との関わりを再認識したり、考えたりする事につながり、ホストの環境意識も向上させると考える。

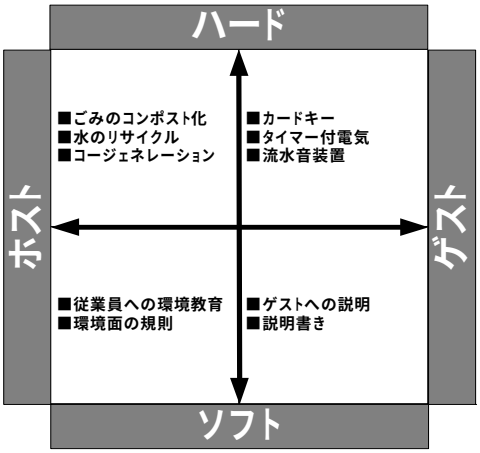

図１　宿泊施設における環境配慮の４領域

3．本研究の目的

そこで本研究では、図１の「宿泊施設における環境配慮の４領域」全ての領域を満たしている、環境共生型ペンション『舎爐夢ヒュッテ』を研究対象とする。

舎爐夢の歴史、システム、プログラムを把握する事、舎爐夢に来るゲストを把握する事から舎爐夢の要素を抽出する。また、オーナーとゲストと環境の関係を明確にする。以上のことから、ソフトーゲストの領域の重要性を明らかにし、環境共生型ペンションへを行う上での提案をする事を目的とする。本研究で得られた結論は、今後、環境共生型ペンションを行う上で、目指すべき指針となると考える。

4．舎爐夢ヒュッテの概要

舎爐夢は信州の長野県安曇野に今から24年前の1979年にオープンした宿泊施設である。舎爐夢はオーナーの臼井健二（以下、臼井とする）が山の仲間たちとアイデアを出し合い、建設プランを練り上げ自らの手で作り上げたセルフビルドの宿である。現在、舎爐夢ではマクロビオティックやパーマカルチャー、自然農などに取り組み持続可能な農的暮らしを実践している。また、宿泊者数は、完成当初から多少の増減はあるものの、ここ数年着実に増加し、売上も増加している。また、何度も訪れるリピーターが多いことも特徴である。

5．本研究の調査・分析方法

ｉ「舎爐夢」調査

①舎爐夢の歴史、②システム、③プログラムを把握し、舎爐夢の全体像を把握するための「舎爐夢」調査である。これは、舎爐夢のホームページ調査、文献調査、オーナーへのヒアリング調査を行ったものである。

ii「宿泊カード」調査

①舎爐夢に来るゲストの全体的特徴、②初めて来る人（以下ビギナーとする）のタイプ、③リピーターの特徴を把握するための、「宿泊カード」調査である。この調査には、舎爐夢で実際に用いられている宿泊カード（宿泊名簿）を用いた。しかし、得られたデータは、1981年から1999年、18年間のゲストのデータである。

6．調査・分析結果

i「舎爐夢」調査の結果

① 舎爐夢の歴史

舎爐夢の歴史をみていくと、大きく3つの時期に分ける事ができる。まず、自然食を視野に入れ始めた時期を第1期（1979年から1988年まで）。半自然食（肉を減らし魚だけにする）の時期を第2期（1989年から2000年まで）。肉を無くし完全に自然食にした時期を第3期（2000年から現在）とした（図2）。以下にこの3つの時期別に歴史をみていく

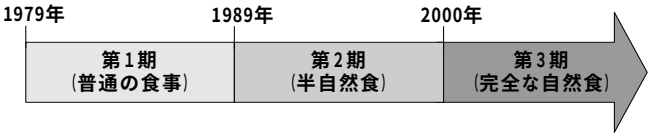

図2　舎爐夢の3つの時期

第1期では、自給自足ということを目指しながら、あまり普通のペンションとはかわりがなかった。しかし、途中で自然農、自然食というものに関心を持ち始めた**萌芽期**である。

第2期では第1期で関心を持ち始めた自然食を、肉を減らし魚だけにするという形で始めた。そのことがきっかけとなり、舎爐夢のことが社会的にも認知されゲスト数も大幅に増加した。さらに、この自然食をきっかけとし、生活の様々な面に、持続可能性ということを実践し始めた**成長期**である。

第3期では実践し始めた持続可能な取り組みというものを成熟させ、ゲストなどに発信するというレベルまでに高めた**成熟期**である。

以上のように舎爐夢は第1期から第2期、第3期と時期をおうごとに成長し、舎爐夢の魅力（要素）が大きくなっている。また、「**完成形はないのでは**」というオーナーの姿勢から、舎爐夢はまだ成長していくのではないだろうか。このように現在まで継続している要因として、次のようなことが考えられる。

- ◆ 「食」に関してだけではないが、一時に全てを変化させてしまうのではなく、徐々に段階を経て変化させたこと
- ◆ 自給自足や持続可能な生活を思想の核とし、様々な取り組みを幅広く行ったこと
- ◆ 思想（持続可能性）を日常生活やプログラムに反映し、その事を通じてゲストに取り組みを伝える事（ソフトーゲストの領域）が、ゲストにとっての魅力となった事
- ◆ 現状に満足しない、向上心・追求心を持っている事

② 舎爐夢のシステム

舎爐夢のシステムの特徴は大きく3つある。

- ◆ **宿泊のタイプの多様性**：ゲストのメンバー構成や経済的理由に関わらず宿泊することができる。
- ◆ **自由で柔軟なプログラム**：基本的なプログラムはあるものの、自由参加であり、ゲストの目的や気分によって自由にプログラムを組む事が出来る柔軟性が存在している事である。
- ◆ **ゲストへの信頼**：最低限の規則はあるものの基本的には自由であり、ゲストを信頼する事に基づいている。

③ 舎爐夢のプログラム

舎爐夢の歴史を分類した3つの時期ごとに、プログラムの変遷に注目した。その結果、プログラムは舎爐夢の歴史と大きく相関しており、「食」を自然食に変えて様々なことを実践していくにつれて、取り組みをプログラムとして還元している事がわかった。

つまり、第1期では普通の施設と変わらないようなプログラムであったのが、第2期を境にして、舎爐夢のコンセプトを体験できるようなプログラムへと変わっていったのである。そして、第3期にはより充実したプログラムが行われるようになったのである。また、舎爐夢のプログラム（第3期）は大きく、基本的なプログラム、定期的なプログラム、一時的なプログラムの3つから構成されている（図3）。

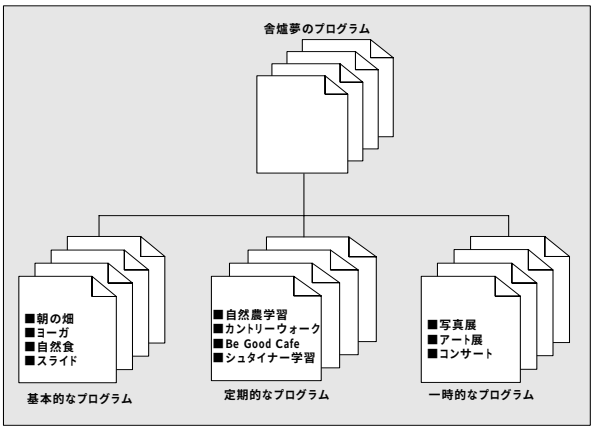

図3　舎爐夢のプログラム構造（第3期）

◆ 舎爐夢の特徴

以上の①②③結果から、舎爐夢の特徴をまとめる

- ◆ **舎爐夢では、1つの施設のみで様々な魅力を持っている。つまり、多様性（Diversity）を成立させている。**
- ◆ **ゲスト別に対応できる、自由で柔軟なシステムを確立させている**
- ◆ **施設の設備から様々な取り組み、プログラムに至るまで、舎爐夢の思想（持続可能な暮らしを目指す）を核として、様々な要素が有機的に結びついている**

ii「宿泊カード」調査の結果

宿泊カードの調査によって、1981 年から 1999 年までの 18 年間における舎爐夢に来たゲストのデータを得る事ができた（表2）。ここでは、18 年間を各年度にデータを集計し、そこから①ゲストの全体的な特徴、②ビギナーのタイプ、③リピーターの特徴を把握した。①に関しては、今回は割愛する。

表２　宿泊カードの年度別の

名簿の年代	枚数（枚）
81年度	876
82年度	921
83年度	969
84年度	730
85年度	679
86年度	743
87年度	721
88年度	779
89年度	840
90年度	881
91年度	1156
92年度	1123
93年度	1112
94年度	988
95年度	761
96年度	787
97年度	809
98年度	873
99年度	806
全年度合計	16554

② ビギナーのタイプ

タイプを把握する際に注目したのは舎爐夢に来る動機である。中でも雑誌を動機として舎爐夢に来ている人に焦点を当ててタイプを分けた。なぜなら、雑誌を動機として来ているビギナーは、その雑誌の内容を把握する事によって舎爐夢に行く目的や興味が把握できると考えたからである。また、雑誌を動機としている人は全体の74.3%を占めており、データの質からも充分舎爐夢に来るビギナーのタイプの傾向を表していると考えたからである。

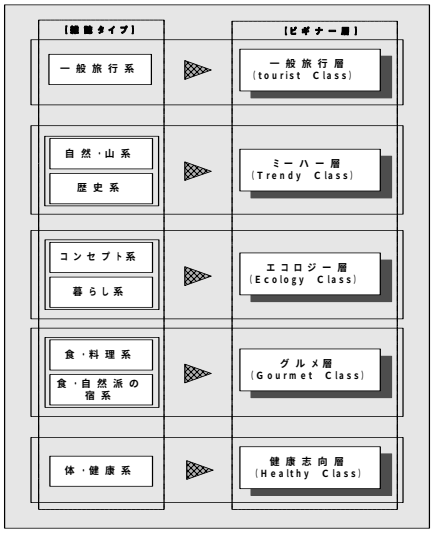

図４　雑誌からのビギナーの層の抽出

まずビギナーが見てきた雑誌を KJ 法で８種類に分類した。そこから、ビギナーのタイプを一般旅行層、ミーハー層、エコロジー層、グルメ層、健康志向層の５つの層に分類した。しかし、この５つの層は、他の動機を考慮すると、最低５つの層という意味である。

以上から、舎爐夢のゲストは単一的なタイプではなく、多様なタイプのゲストが訪れるという事が言える。しかし、最初から多様であったわけではない。第１期から第２期へと、時期が経つにつれ、舎爐夢の魅力が増すにつれて徐々に多様になったと考えられる（図5）。

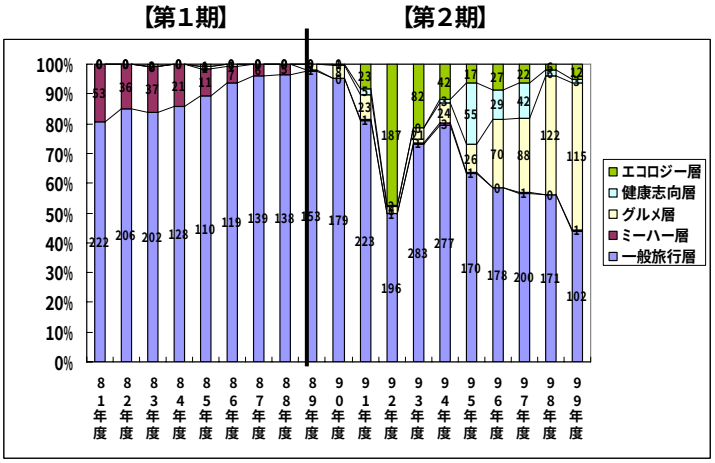

図５　年度別のビギナータイプの変遷

③ リピーターの特徴

- ◆ 舎爐夢のリピーターには大きく閉鎖型リピーターと連鎖型リピーターという２つのタイプがある
- ◆ 舎爐夢の連鎖型リピーターは他の宿泊施設の連鎖型リピーターとは異なり、紹介する人自身も何回も舎爐夢に訪れる
- ◆ 舎爐夢のリピーターは１年に何回も訪れる割合が高い

このような舎爐夢のリピーターの特徴には、舎爐夢が様々な取り組みを行っており魅力の多様性を確立させていることが関係している。つまり、舎爐夢は基本とする部分を残し（懐かしさ）、さらにそこから上乗せさせるように発展させていく（新鮮さ）のである（図6）。この懐かしさと新鮮さを両立している事が、舎爐夢がリピーターを魅了している仕組みであると考える。

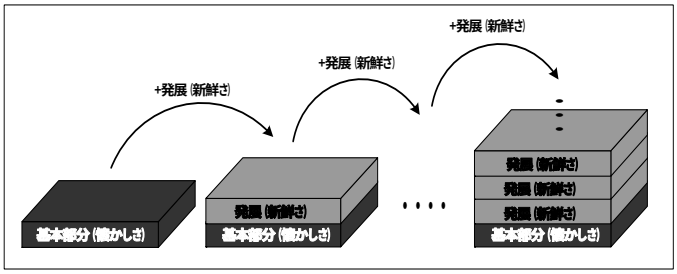

図６　舎爐夢の発展モデル

７．結論

意味的参加のはしご[1] とホストとゲストの関係（表３）、環境配慮の４領域（図１）、ビギナーのタイプの変遷（図５）の３つを、総合的に人間・環境システムの視点から考察する。

表３　意味的参加のはしごとホストとゲストの関係

		ホスト	ゲスト
⑥意味付与・創造 ⑤意味参加・支援	創造（innovation）		
④意味宣伝 ③意味伝達	伝達（communication）		
②意味入手 ①意味享受	受容（acceptance）		

1）近藤隆二郎：環境イメージの発達過程における役割行為の意義と効果に関する基礎的研究，大阪大学大学院工学研究科博士課程学位論文，p26（1994）

【第１期におけるオーナー、ゲスト、環境イメージの関係(図７)】

オーナー（ホスト）が自分の生活を見つめなおし、環境との関係を模索している。第１期の取り組みとしては、図１のホスト側のみであり、取り組みはあまり実践されていない。また、環境との関係を明確できていないので、日常生活や宿泊業としての舎爐夢に、環境への取り組みを反映できていない。したがって、ゲストにとっての魅力は、セルフビルドである事や、自給自足を目指している事しかなく、その事に伴ってゲストのタイプも一様化（ミーハー層）する（図５）。この第１期は、オーナーと環境の関係のみで、ゲストと環境の関係は築けていない。

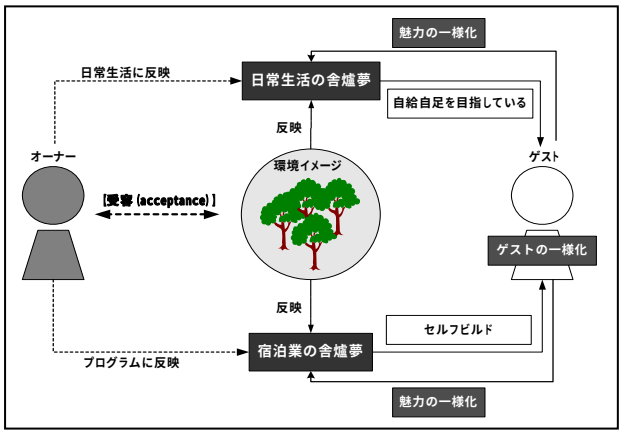

図７　第１期におけるオーナー、ゲスト、環境イメージの関係

【第２期におけるオーナー、ゲスト、環境イメージの関係(図８)】

第２期の取り組みでは、環境とのかかわりが明確になり、持続可能な生活を目指すということを実践し始める。よって、持続可能性を日常生活やプログラムに反映することによって、図１は全領域で増加する。また、ソフトーゲストの取り組みによって、ゲストに環境に対する取り組みを伝達する事が出来ている。この事が、ゲスト側にとっては魅力になり、舎爐夢に行く目的が増加し、ゲストの多様化が生まれるのである（図５）。また、ゲストの中には、環境に対して興味が沸いたり、考えたりする事によって「もちかえり」[2] を行う人もいると考える。つまり、第２期は、オーナーと環境の関係が明確（持続可能な生活を目指す）になり、ソフトーゲストの取り組みに反映させたことにより、環境とゲストの関係が生まれた。

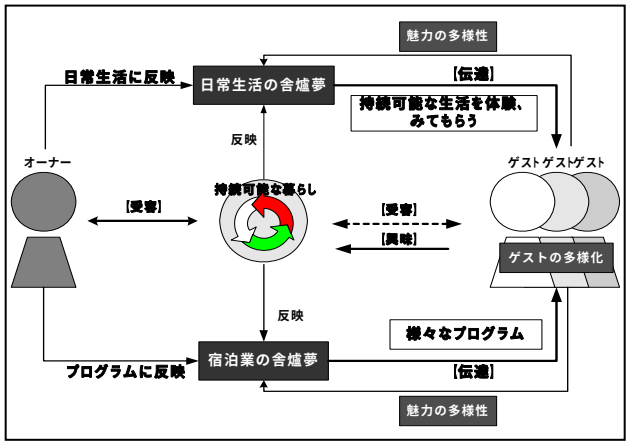

図８　第２期におけるオーナー、ゲスト、環境イメージの関係

【第３期におけるオーナー、ゲスト、環境イメージの関係(図９)】

オーナーと環境の関係は明確なので、持続可能な暮らしを目指す事を、更に発展させていく。図１の４領域は全て充実する。また、この時期には宿のコンセプトが「舎爐夢の暮らしを味わって欲しい」と固まり、そのためにソフトーゲストの領域が特に充実する。

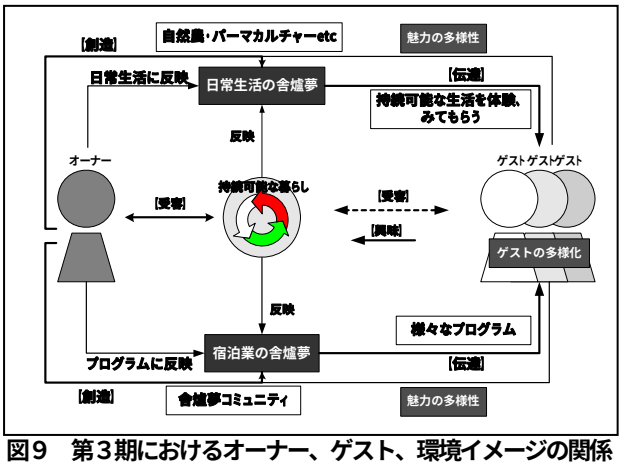

図９　第３期におけるオーナー、ゲスト、環境イメージの関係

舎爐夢では、時期が立つにつれ、環境との関係（持続可能な暮らしを目指す）が明確になり、そのことをソフトーゲストの領域に反映している。これは、宿のコンセプトが「**舎爐夢の暮らしを味わって欲しい**」と固まったからと考える。

以上の結果を踏まえてソフトーゲストの領域の重要さを示す。

- ◆　他の領域をつなぐ役割をしている
- ◆　ゲストにとって魅力に成り得る⇒ゲストの多様化に繋がる
- ◆　持続可能性など「もちかえり」が行われる可能性がある⇒リピーターやゲストの意識変化に繋がる
- ◆　オーナーはゲストとのコミュニケーションが増え、そこから情報を読み取り、それを反映する事が出来る

◆　環境共生型ペンションの要素

舎爐夢の調査から把握した事から、環境共生型ペンションに必要だと思われる要素を以下に示す。

- ◆　**施設の魅力が、自然食のみのように単体で取り組むのではなく、多様性（Diversity）を成立させる**
- ◆　**設備から様々な取り組み、プログラムに至るまで、思想を核として、全て有機的に結びついている**
- ◆　**取り組みを増やしていく時は、基本とする部分を残し（懐かしさ）、さらにそこから上乗せさせるように発展させていく（新鮮さ）（図６）。つまり、懐かしさと新鮮さの共存が必要**
- ◆　**環境との関係（付き合い方）を明確にして、意味的参加のはしごを上るように、段階をへて変化させていく**
- ◆　**ゲスト別に対応できる、自由で柔軟なシステムを確立する**
- ◆　**ソフトーゲストの領域を重点的に取り組む事により、オーナーはゲストから情報を汲み取り、その事を取り組みに反**

2）近藤の「もちかえり」を読み替え、「宿泊することにより、間接効果や波及効果というものを含み、宿泊後にどのような影響・効果が残ったか」と捉える

映させる。